

郷土史への扉

「上野原縄文の森」は今年の十月で開園して十周年を迎えます。今回は上野原遺跡とその魅力について紹介します。

上野原遺跡の発見

平成九年五月、「約九千五百年前の国内では最古で最大級の集落、上野原遺跡発見」というニュースが、日本中を驚かせました。

上野原遺跡は、二条の道跡を中心に五十二基の竪穴式住居跡、石蒸し調理施設の集石遺構や燻製調理施設の連穴土坑などが発見されました。

中でも十基の竪穴住居跡の土の中から約九千五百年前の桜島から噴出した火山灰が検出されたことが、年代の特定と十基の住居が同時期に存在したことを証明しました。これは、南九州では縄文時代の早い時期からすでに十軒ほどの住居で構成された「定住したムラ」が存在していたことを示しています。

南九州独特の縄文文化

それまでの縄文人の定住化は、青森県の三内丸山三内丸山遺跡を代表するように、約五千五百年前とされてい

ましたが、上野原遺跡の発見によって、一挙に約四千年もさかのぼったことになりました。

住居跡は、竪穴の中に柱跡がなく、竪穴の周辺部に柱跡がある独特な構造となっています。

東日本の土器は「縄文時代」という名前からもわかるように、土器の文様(模様)は、縄目文様を使っていましたが、上野原遺跡から出土した土器は貝殻で施していました。しかも、土器の形は筒型をしており、底の形も尖った底(尖底)や丸い底(丸底)ではなく、平たい底(平底)をしていました。

このように、縄文時代の早い時期の南九州は、ほかの地域にはない「南九



州独特の縄文文化」が開園して十周年記念

この縄文文化は、屋久島の北にある硫黄島や竹島を外輪とする海底火山である鬼界カルデラの噴火(約六千四百年前)によって壊滅するまで続きました。

上野原縄文の森 開園十周年記念
上野原遺跡の魅力

上野原遺跡の魅力

これまで縄文時代というところ、東日本、とりわけ東北地方に多くの縄文遺跡が発見されており、青森県の三内丸山遺跡の発見によって、縄文文化の先進性を、いつそう強めることとなりました。しかし、上野原遺跡の発見はその通念を改めて考えなおさねばならないものとなりました。

上野原に人々が住んでいた時代は、最後の氷河期である「ウルム氷河期」から温暖期に向かう気候変動の時期で、植生も落葉広葉樹から常緑広葉樹に交代する過程であり、その影響は日本では南九州が最初に受けることになりました。南九州の縄文文化が他地域と異なった発達過程を繰り広げた理由には、気候変動による植生の交代が深く影響

したとも考えられます。

また、上野原遺跡のある上野原台地は、幾層もの火山灰が覆っており、上野原遺跡の年代を決定づけたのも桜島噴出の火山灰です。南九州独特の縄文文

化を壊滅させたのも鬼界カルデラ噴火による火山灰(アカホヤ)でした。

このように、上野原遺跡は、初期の定住化の様子を示すだけでなく、独特の縄文文化、変動する気候(植生の交代)、度重なる火山活動など、多くの過去の出来事に出会える魅力的な遺跡です。今年で十年目となる「上野原縄文の森」に足を運んでいただき、縄文人の息吹にふれてみてはいかがでしょうか。

(文責 鈴)

※上野原遺跡では、縄文時代早期前葉(約九千五百年前)遺跡と早期後葉(約七千五百年前)遺跡が発見されていますが、ここでは早期前葉の遺跡を中心に紹介しました。